

適性型 I 表現力

注 意

- 1 問題は **I** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は四十分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入すること。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受験番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

問題は1ページからです。

1 文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

(*印のついている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

原始の時代から、私たち人類は自然環境かんきょうを活用して生活してきました。しかし18世紀半ばから19世紀にかけての*産業革命以降、世界の人口は急激に増えて、1850年には約12億人だった人口は、2011年には70億人を超こえました。同じ期間に経済発展して、世界の総国内総生産(GDP)は、1850年の約1兆ドル(約10兆円)から2011年には約70倍も伸びて約70兆ドル(約7700兆円)になっています。地球上に繁栄はんえいする人類ですが、これだけの人口が食料や水を得て、十分な暮らしをしているのでしょうか？

実は世界銀行によると、現在世界で生産されている食料はこれだけの人口を養うのに十分な量があるそうです。しかし実際には、収入が1日1.9ドル(約220円)以下しかない極度の貧困に苦しむ人たちが7億人もいて、飢餓きがに瀕ひんしています。世界には現在約200か国ありますが、そのうち日本やアメリカ・ヨーロッパ諸国のように*所得が高く、経済が発展おこしている国々、つまり先進国は約30か国にすぎません。最も開発が遅おそれている途上国(国民1人当たりの年間の所得が1000ドル(約11万円)以下)が約30か国あり、さらに年間所得1万2000ドル(約130万円)以下の国が約100か国あります。つまり世界

の国々の間には、大いなる貧富の差があつて、非常に裕福ゆうふくな人々は一握りしかないのです。残りは経済発展の途上であり、そのうち極端きょくたんな貧困に苦しむ人口が世界人口の1割にも上るといふことになります。

貧困に苦しむ人たちは、食料が十分でないだけでなく、栄養失調で健康も害しており、病気になつても医療いりようも受けられません。教育を受けることも出来ず、字も読めない人口は世界で8億人にも達しています。これらのすべての人が、飢餓きがに苦しむことのない文化的な生活を望むのは当然のことなので、どの国も必死で経済活動を推進し、所得を伸ばし、開発を進めようとまい進しています。

また、爆発ばくはつ的な人口の増加に伴ともなって、食糧しょくりょう生産や産業活動のために森林が切り払はらわれ、木材・紙などの森林資源や漁業資源が*過剰かじょうに採られるようになりました。人類が地球環境にかける負担が急激に増したのです。さらに18世紀から始まった産業革命以降、人類は石油や石炭などの化石燃料をエネルギー資源として使って、電気を作ったり、車を走らせたり、鉄鋼生産などの産業活動をするようになりました。

こういった人間活動が地球へ与あたえる負荷を調査している*WWFの報告「生きている地球レポート2014年版」によると、人類は現在の地球の持つ生産力の1.5倍を消費しているといひます。これはいわば利息ほんいの範囲をはるかに超えて、あらゆる生産力の源である地球環境の

「*元金がんきん」に手をつけている状態です。このまま急増する人類が経済発展だけを追求していくならば、人類の生活を支える地球環境そのもの

が危うくなってしまいました。

このため「持続可能な開発」という*概念がいねんが生まれました。これは「現代の世代が、将来の世代の利益を損なわない範囲内で環境を利用し、要求を満たしていこう」という考え方です。

つまり、世界の人々が貧困を*克服こくふくして文化的な生活をできるように、開発は進めていくけれども、その開発は地球の生産力の範囲に収めて持続可能なものにしていこう、ということです。その理念は、環境と開発をお互たがいに共存できるものとしてとらえています。1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催かいさいされた国連環境開発会議で、この「持続可能な開発」を指していこうと合意されたのです。

(小西雅子『地球温暖化は解決できるのかーパリ協定から未来へ!』より)

〔注〕

産業革命：18世紀後半にイギリスに始まった、技術革新による産

業・経済・社会の大変革。

所得：収入。利益。

過剰：多すぎること。

WWF：公益財団法人世界自然保護基金。

元金：貸し借りしたものの金。もとで。

概念：物事に対する考え方。

克服：努力して困難にうちかつこと。

文章2

アメリカの環境*倫理学^{リンドリ}では、長らく「自然の価値論」という議論が行われてきました。それは「自然にはどのような価値があるか」を問うものですが、なぜこのような議論をしなければならなかったのでしょうか。それは、自然を守ろうという主張に対して、「なぜ自然を守らなければならないのか」という疑問が*呈^{てい}されるからです。その疑問に対して「自然には〇〇の価値があるから守らなければならないのだ」と答えるときの、〇〇にあたるものは何なのか、を検討するのが環境倫理学の課題だったのです。簡単に言えば、自然を守る理由を探究してきたわけです。

では、アメリカの環境倫理学はどのような答えを用意したのでしょうか。一つは「道具的価値」というものです。これは、自然は人間にとって役に立つから守るべきなのだ、という答えです。ここには人間の道具としての自然を守るという考え方があります。

もう一つは「内在的価値」というものです。これは、自然はそれ自体がすばらしいものだから守るべきなのだ、人間にとって役に立つかどうかとは無関係に守るべきなのだ、という考え方です。

みなさんは、なぜ自然を守るのか、と聞かれたときにどう答えるでしょうか。ここで、先に示した二つの陣営^{じんえい}（人間のためvs自然自体のため）に分かれて議論することも可能ですし、アメリカの環境倫理学ではそうする傾向^{けいこう}がありました。

しかし、こういう二分法についてはこんな疑問もわくでしょう。自然を守る理由をもっとたくさん挙げることができなのに、どうしてこの二つに絞^{しぼ}らなければならないのか。特定の場所の自然が問題になっているときには特にそうでしょう。

たとえば、「この自然は美しいから守るべき」という理由は、その場所の自然を美的に楽しむ*人間本位の理由でもありますが、かといって道具としての価値とは言い切れず、むしろその場所の自然自体のすばらしさを重視しているように思えます。

あるいは「この森には神様が宿っているから開発してはいけない」という場合はどうでしょうか。こういう文化的・宗教的な理由は、「道具的」でしょうか、「内在的」でしょうか。文化や宗教も人間のための道具だ、と割り切る人には「道具的」といえるかもしれませんが。しかし多くの場合、文化や宗教は道具を超えたものと理解されているように思えます。

このように考えていくと、先の二分法にとらわれず、多様な理由をすべて尊重しながら議論していくほうが、よりよい結論を生み出すように思われます。実際に、近年の環境倫理学では、自然を守る理由はたくさんあることが認められるとともに、自然を守るのは自然のためでもあるし、人間のためでもある、という考え方に意見が集約されてきています。

（吉永明弘『はじめて学ぶ環境倫理―未来のために「しくみ」を問う』より）

〔注〕

倫理…人として行うべき社会的に正しい行為の基準。道徳。

呈される…示される。

人間本位…人間中心。人間目線。

〔問題1〕

文章1

―線「このまま急増する人類が経済発展だけを追求していくなれば」とありますが、人類が経済発展を追求しなければならぬのは、世界には人口増加と共に世界にどのような背景があるからですか。五十字以内で答えなさい。

(句読点や記号もそれぞれ字数に数えます。)

〔問題2〕

文章2

―線「なぜ自然を守らなければならないのか」という疑問について、これまでのアメリカの環境倫理学ではどのように議論されてきましたか。「議論されていた。」に続く形で八十字以内で答えなさい。(句読点や記号もそれぞれ字数に数えます。)

〔問題3〕

文章1と文章2のそれぞれの内容をふまえて、あなたは

自然環境にどう関わっていかうと思いますか。

文章1と文章2、それぞれの要点にふれ、あなたの考え

を四百字以上、四百四十字以内で適切にまとめなさい。

ただし、次の「条件」と「きまり」にしたがうこと。

〔条件〕

次の二段落構成にすること。

① 第一段落で文章1と文章2、それぞれの要点をまとめること。

② 第二段落で「①」をふまえ、自然環境にどう関わろうと思うか、

あなたの考えと、そのように考えた根拠・理由こんぎよを書くこと。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行がえは、段落をかえるときだけとします。
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。

